

# 日赤看護婦と陣中日誌

語りと記録の資料論・論議

新谷尚紀

A Japan Red Cross Nurse and Her Field Diary: An Essay on the Documentation of Narrative and Record

- ①はじめに
- ②語られる過去
- ③記録された過去
- ④小括

## 【論文解説】

かつての民俗調査の多くは、主に社会生活の制度上の問題を中心としてきたために、個人の生活史、ことに戦争体験などについては注意を向けることが少なかった。しかし、一九八〇年代以降、社会学や歴史学などからの影響により、民俗学においても民俗の伝承者とは誰か、という当然の問い合わせが発せられるようになり、個人生活史が注目されるようになつた。本稿は日本赤十字社の派遣看護婦として、日中戦争開戦時の約二年半、病院船勤務に従事した女性の「陣中日誌」と、面談聞き取りによって得られた情報をもとに、民俗学の立場から、語られる情報資料と書かれた情報資料との関係性に注目しながら、戦争体験者が所有しているかけがえのない情報資料を歴史学や民俗学がどのように意義あるものとなしうるかという問題を考えてみようとしたものである。そして語りと記録の関係性について、次の三点が注目された。第一に、語られるが記録されにくいものとは、一つには社会的な強制力をともなう義務事項に対

する「疑念」であり、もう一つは個人の自己存在に関わる「矜持」である。歴史学も民俗学も、この個々人の生活史の中に書かれることがなく蓄積している「疑念」と「矜持」とを射程の内に取り込む必要がある。第二に、記録されるが語られないものへの注目により、あらためて書くこととは自らの存在証明、自己確認の手段の一つであり、文字資料から情報を得る学問にとって、人がもの書く衝動、欲求、モティベーションについて常に熟慮し分析する姿勢が必要不可欠であることが再認識された。第三に、当然ながら、語りと記録が相乗効果的に結びつくとき貴重な情報資料が獲得できる。今回の戦争研究にとつてはむしろこの情報こそが最も価値あるものといえようが、本稿では論文末に小括として九点ほど提示しておいた。それは、病院船の収容人數や便乗者などの実態、悲惨な戦傷兵の実態、過酷な勤務の中で奮闘する看護婦の実態等々である。詳細は本文及び小括を参照されたい。